

〈論文〉

ヴラジミル市の建築史と装飾

Architectural culture in Vladimir

川村 明海 (KAWAMURA, Akemi)

Abstract

Vladimir city is located near ment by Moscow. It is well known as the old capital in the 12th century. In this paper, I show three steps of develop of the city in its history. The Escapee from Rostov built Vladimir. Vladimir had been developed successfully by Yuri Dolgoruki, Andrey Vogolyubski and Vcevolod III between the 11th and 13th centuries. They ordered the building of many churches and tried to introduce Christianity.

You can find that churches have reliefs on the walls in Vladimir and around the city. I have a lot of questions. Why were those walls decorated? Who gave the orders, and was construction completed ? What kind of differences exist from Novgorod? Why did not Kiev allow an architectural culture like Vladimir? churches in Vladimir? I try to answer these questions and to show some tools in addition to photos and data.

At last, I would like to analyze “intercultural communication.” N.N.Voronin’s thesis is very useful in my study. So I show you his work in Japanese. It is important that his work be included in intercultural studies.

はじめに

古都ヴラジミル市¹は、現在では観光都市として多くの巡礼者や国内外問わず多くの旅行者を受け入れている。ヴラジミル市は、ロストフ豪族による奴隷のような扱いから逃れた民衆によって形成された。ヴラジミル市は、11世紀から13世紀にかけて、ユリー・ドルゴルーキー、アンドレイ・ボゴリュプスキー、フセヴォロド3世の父子3世代にわたって繁栄を遂げた。彼らは、北東ルーシ（図1）に多くの教会を建設し、キリスト教の普及に尽力した。本論ではヴラジミル市の都市計画の史実を明らかにし、残存する教会建築とその外壁に施されたレリーフから建設に関わる諸問題を検証する。政治的目的のみならず、個人的な事由によってもキリスト教の教会が多く広範囲で建設されていたこと、当時のルーシがキエフ公国を中心とする諸公国の連合であったが、ヴラジミル市が周辺1公国に過ぎないにもかかわらず、国際色豊かな文化継承能力があったことを示したい。

筆者は、国際文化学的立場から、ヴラジミル市の研究および先行研究についての論証を試みる。

1 「市」の表記はロシア語の gorod を日本語に当てはめた。また、ノヴゴロド「公国」やキエフ「公国」と同位置で筆者は用いている。

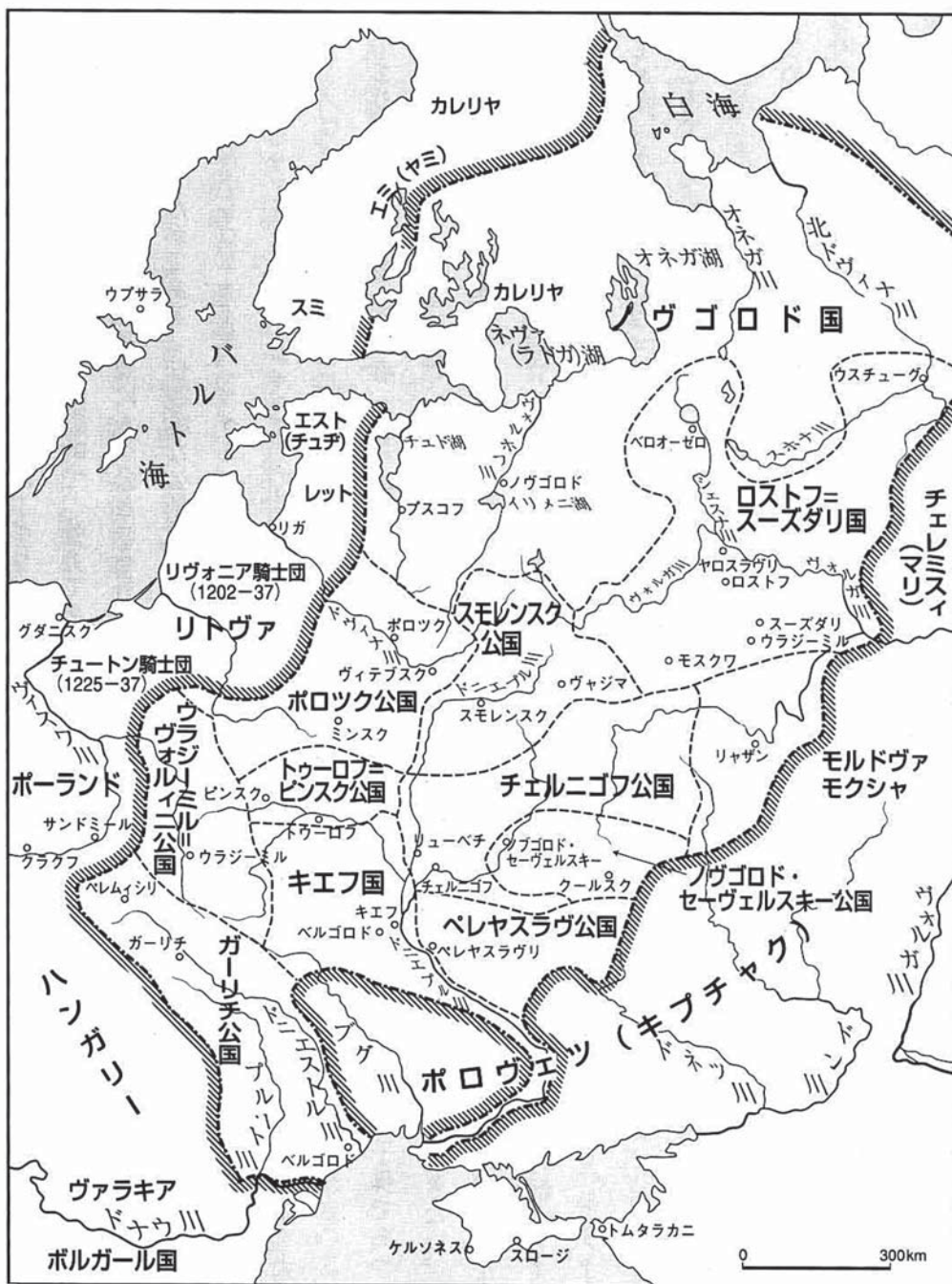


図1 出典：「ロシア史1～9～17世紀」田中陽児・倉持俊一・和田春樹編集、山川出版、1995年

ヴラジミル市の建築装飾の問題を考える際、時代が変遷するたびに国境もしくはテリトリーの変更が必要になる。10～13世紀のルーシを簡単に旧ソ連、現在のロシアの国境線を念頭において見ることは危険である。なぜならば、著者の研究対象地域であるヴラジミル市は現在のロシア国内に所在するが、当時ルーシ諸公国の中心であったキエフ公国との関係無しには成立しなかった。キエフ公

国は現在ウクライナにあった。国際文化学的視点では、空間的あるいは時間的制限を超えて考察することが必要である。国際文化学は近現代の課題として適用させることが一般的であるように思われがちであるが、著者の論考対象時期である10～13世紀のように古い時代の研究にも適用させるべきである。さらに、既成の学問分野を超えて検証することは言うまでも無く、国際文化学的論証であろう。本稿では国際文化学的な視点を意識し、ヴラジミル市を対象にした地域研究において必要な資料を可能な限り収集し、それらを活用した。

筆者が主として参照するのは、美術史学者 N・N・ヴォロニンの "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov" の研究書 (1961 年刊) である。彼は歴史学、建築学、地層学、図像学、言語学と多角的な観点からヴラジミル市、スズダリ周辺の研究をまとめている。1961 年当時「国際文化学」という学問体系こそ提唱されてはいなかったが、学際的論文として評価して良いと思われる。

1. 都市ヴラジミル市の成立

キエフ公国中心のルーシにおいて、ヴラジミル市は11世紀に北東に建設された。北東ルーシはヴラジミル・モノマフ²が領土拡大の目的で支配下に組み入れた。ヴラジミル市が成立するまで、北東地方ではスズダリやロストフが有力都市であり、北東ルーシはロストフ・スズダリと呼ばれていた。10世紀から11世紀にかけて、スズダリは豪族によって繁栄し、ロストフは軍事都市として成立していった。周辺の異民族からの攻撃に対抗するため、この頃のルーシの都市国家は軍事国家に成長する傾向が強かった。特に、11世紀にはロストフでは豪族が住民、商人、手工業者たちの利益を自分たちのものとした。ゆえに、奴隷のような生活を強いられていた住民や商人、手工業者たちは新たな地へと逃亡した。この新たな地が後にヴラジミル市となる。ヴラジミル市の住民達は生活苦が理由で、自分たちを「小さきものたち」と称した。

多くの都市が支配者と被支配者、つまり豪族と奴隷の関係によって構成されていた。しかし、逃亡した奴隷によって都市形成を成したヴラジミル市は形成初期には身分区別は比較的緩やかだったと思われる。ヴラジミル市の発展は速く、1169年ヴラジミル市がキエフ公国との戦いに勝利して、ルーシの首都となった。この時期、北東ルーシで繁栄を見ていた都市は、ヴラジミル市の他にニジニノヴゴロド、スズダリ、ヤロスラヴリ、ズベニゴロド、ロストフ、ムロム、コストロマである。フセヴォロド3世以降、ヴラジミル「市」ではなく、ヴラジミル「公国」と呼ぶことになる。本稿では、主にヴラジミル市及び狭い範囲での周辺地域のみを扱うため、ヴラジミル市と統一する。しかし、下述でキエフ公国やノヴゴロド公国との関係を立証したり比較を試みる時、公国と同じ規模でヴラジミル市を考察している。

2 ヴラジミル・モノマフ (在位 1113-1125) はヤロスラフ大公の子フセヴォロドとビザンツ皇帝コンスタンティノス9世の娘の間に生まれた。キリスト教意識を政治的イデオロギーに利用し、年代記編纂に尽力した。また、民族蜂起対策として債務の取り決めに法規するなど、内政改革を行った。(参考: 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史1-9～17世紀』山川出版社、1995年、p.129参照)

2. ヴラジミル市発展の3段階

まずヴラジミル・モノマフが北東ルーシの基盤を形成した後、ヴラジミル・モノマフの子ユリー・ドルゴルーキー³が都市デザインのアイデアを集約し、主要な教会や宮殿の建設を手がけ、ユリー・ドルゴルーキーの子アンドレイ・ボゴリュプスキー⁴が教会や聖堂の建設をユリー・ドルゴルーキーから引き継ぎ発展・完成させた。しかし、1186年に大火災で多くの建築物が焼失したことを受け、アンドレイ・ボゴリュプスキーの弟フセヴォロド3世⁵が消失した建物を再建し、外装・内装の装飾まで施した。彼の下で都市として成熟した同市は、都市設計や建築、建築物の装飾に特徴を示している。さらに、600年ほど後の1778年に、ヴラジミル市は再び市中大火災に遭遇し、その後、多くの教会が再建された。18世紀の再建では、旧アンドレイ公邸（宮殿）が、12世紀に建立された時の状態に戻された。筆者は以上の発展過程を表1のように3段階にまとめた。

第1段階は11世紀から12世紀半ばまでで、都市デザインの形成期にあたる。ヴラジミル・モノマフが北東ルーシを開拓した後、彼の北東における活動の拠点はロストフであった。河川の間には多くの植民村が存在し、手工業が発展していた。ここで重要な点は、これらの植民村で石造建築⁶が始まっていたことである。ロストフ南部では石造りの古代建築が繁栄する。実は、10世紀にはロストフに新住民が増加し、11世紀には木工業者が聖堂や住居に装飾を施した。特に、ヴラジミル市の住人は才能豊かであったので、ヴラジミル・モノマフはロストフに多数の木造古代聖堂を立てることが出来た。『ニコン年代記』⁷には、ロストフの豪族がヴラジミル市の住人について語ったことが記されている。そのことから、ロストフには高度な建築文化が発展していたことが伺える。しかし当時は、石造建築はそれまでにない手法を用いた新しい文化であり、北東ルーシの中でもヴラジミル以外の都市には及んでいなかった。そして、ロストフも他公国と同様に、キエフ公国の属国としての役割を果たさなければならなかった。建築文化において、ロストフが高度な建築技術を有しながらキエフ公国に従属し続けたことは、後年のヴラジミル市との決定的な違いである。

3 ユリー・ドルゴルーキー（在位 1120-1157 年）はヴラジミル・モノマフの子で領土拡大に熱心だった為、手長公とも称される。彼は北東ルーシに留まらず、南ルーシにも内政干渉した。彼の南方政策は、多くの戦いを引き起こしたので、自国内を荒廃させる結果をもたらした。

4 アンドレイ・ボゴリュプスキー（ヴラジミル公 在位 1157 年 -1174 年）はユリー・ドルゴルーキーの子で、1111 年スズダリに生まれ、人生の多くを北東ルーシで送った。自公国の同族者と貴族層を排除し、また南方キエフ諸公との複雑な外交政策を行い、強力な公権力の確立を目指した。1169 年キエフ公国を攻略し、首都をヴラジミル市に移した。熱心なキリスト教者であり、貧者に施しをし、多くのキリスト教会建設を命じた。（一部引用 B・O・クリ→ユチュフスキー著八重樫喬任訳『ロシア史講和 1』、恒文社、1979 年、p.411 参照）

5 フセヴォロド3世（ヴラジミル公後キエフ公 在位 1154 年—1212 年）はユリー・ドルゴルーキーの子で、アンドレイ・ボゴリュプスキーの弟。子沢山であったため、大巢公とも称される。兄アンドレイ・ボゴリュプスキーの統治を引き継ぎ、北東ルーシを統治しつつ、公の世襲問題に尽力した。

6 ルーシの建築物の主流は木造建築であった。12 世紀、石造建築はキエフ公国、ノヴゴロド公国、ヴラジミルにしか見られない。

7 「『ニコン年代記』」は 1520 年代末にダニール府主教が編纂したものとされる。9～16 世紀を扱い、年代記全集の 9 巻から 14 巻に収録されている。きわめて豊富な内容とここにしか出てこない記述などがあって、先行する諸年代記の集大成的位置を占める。17 世紀の総主教ニコン所蔵の代表的写本からこの名が付けられた。（引用：田中陽児・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史 1-9～17 世紀』、山川出版、1995 年、p.92 参照）

第2段階は12世紀半ばから13世紀初頭の都市建設期にあたる。その前半のアドンレイ・ボゴリュプスキー治世の建設ラッシュ期を都市建設前期とし、フセヴォロド3世治世の建設ラッシュ、特に1185年のヴラジミル市中大火災以降の再建時期を都市建設後期とする。ウスペンスキー聖堂(日本名:生神女就寝聖堂 図2)を始め、教会や聖堂、公(支配者)の宮殿が相次いで建設された。年代記(年代記名不明)⁸には、1185年ヴラジミル市中が大火災に見舞われたと記されている。その火災により32にも及ぶ教会・聖堂が焼失した。そのため、フセヴォロド3世は1186年から1189年にかけてウスペンスキー聖堂(図3)を再建した。

第3段階は都市再建期であり、1778年ヴラジミル市中の大火災以降再建が進んだ。

1157年ゲオルギイ聖堂(図4)が建設された場所は、ユリー・ドルゴルーキー公の邸宅内であった。1778年の大火災で焼失した後、1783年から1784年の再建によって現在はゲオルギエフスカヤ教会



図2 ウスペンスキー聖堂



図3 ウスペンスキー聖堂構成図 出典: N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"

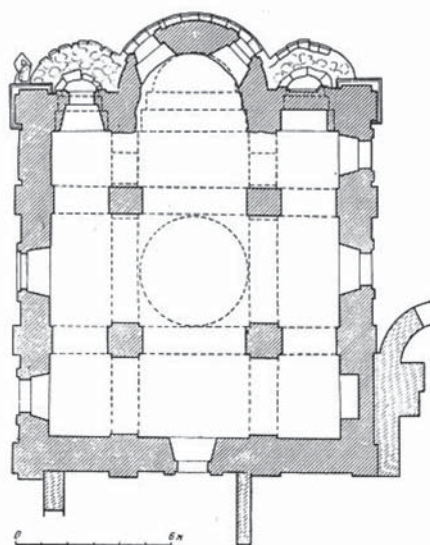


図4 ゲオルギヤ教会設計図 出典: N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"

⁸ 引用: N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov" M 1961

として残存している。このように、焼失・再建を繰り返す中で、建物の名前や役割が変わっていたことは興味深い。表1はヴラジミル市発展の各段階をまとめたものである。

＜表1＞ ヴラジミル発展の過程

段階	年代	期名		特徴
第1段階	12世紀まで	都市デザインの形成期		・植民村で石造建築が始まる ・11世紀に木工業者が聖堂や住居に装飾を施す
第2段階	12世紀半ば～13世紀初頭	都市建設期	前期	・教会、聖堂、宮殿の建設ラッシュ
			後期	・1185年の火災以後の復興・再建
第3段階	1778年以降	都市再建期		・1778年の大火災で多くの建築物が焼失 ・再建が進み、建物の名前や役割を変えて存在

本稿では第1段階と第2段階を中心に扱う。

3. ヴラジミル市における建築の特徴

ヴラジミル市の建築は白石の外壁にレリーフ(図6)を装飾しているのが特徴である。それらのレリーフは、キエフ公国やノヴゴロド公国などの建築装飾と比較にならない程大規模である。ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂を手がかりに、他地域とは異なる建築様式の背後に存在する問題を考えてみたい。

ノヴゴロド公国と比較した場合に、ヴラジミル市の特徴がより明確になるだろう。前述したように、12世紀石造建築が建設されたのは、キエフ公国、ノヴゴロド公国、そして、ヴラジミル市のみであった。そのほかのルーシ地域では、木造建築しか建設されなかった。しかしながら、ノヴゴロド公国も、ヴラジミル市も住居など多くの建築物が木造であったため、市中で火事が起こった場合には、大きな被害を受けた。ノヴゴロド公国が石造建築を多く持つことになった



図6 ドミトリエフスキー聖堂のレリーフ

のは、宗教的にビザンツ帝国とのかかわりが深かったためである。ノヴゴロド公国も、ヴラジミル市と同様にキエフ公国からの脱却を早くから試みる。ノヴゴロド公国は教会の大主教を正教会における聖職位階制の最高位である総主教に格上げしビザンツ帝国から認められた。そのため、キエフ公国から宗教的援護を求めるのではなく、直接ビザンツ帝国と交渉を持った。ノヴゴロド公国から

のビザンツ帝国への殉教者が多いのもそのためである。キエフ公国はノヴゴロド公国に対して、宗教的には穏やかに対応したと予想される。一方、ヴラジミル市は1169年にアンドレイ・ボゴリュプスキーがキエフ公国を陥落させ、武力による政治的解決を図った。そのために、教会建設はキエフ公国からの承認を得られなかった上に、公邸宅内の教会聖堂の礼拝は厳しく禁じられた。

次に、両都市の異文化交流を見てみる。ノヴゴロド公国はギリシアから絵師や建築家を招致した。ビザンツ帝国もギリシアも東方正教を国教としたことから、この3国の宗教的なつながりは深かったと考えて良いだろう。また、ノヴゴロド公国にはハンザ商人が居留していた。しかし、13世紀から17世紀まで「ノヴゴロド商館規則」なるものが存在し、ハンザ商人の自由を規制していた。居留地は限定され、その周囲には堀が張り巡らされていた。夜は堀の門が閉じられ、番犬が放たれた。一般民衆とは全く隔離され、接触は無かった。一方、ヴラジミル市には、前述したように、神聖ローマ皇帝から石造建築の職人が派遣されていた。これらロマンス系西洋職人達はヴラジミル市の職人達を育成した。つまり、異文化人と民衆が隔離されることは無かった。

ヴラジミル市の石造建築がルーシでは稀であったことは明白である。さらに、高い文化発展を果たしたノヴゴロド公国でさえキエフ公国とは主従関係を表向き保っていたのに対し、ヴラジミル市は政治的にも文化的にもキエフ公国の支配からの脱却を目指した。この政治的文化的な要因は建築にも大きな影響を与えていた。

ウスペンスキー聖堂も上記の現・ゲオルギエフスカヤ教会と同様の経緯を持つ。1158年から1160年にかけて、アンドレイ・ボゴリュプスキーの命でアンドレイ公の聖堂として建設されたが、1185年に火災によって焼失し、1185年から1189年にフセヴォロド3世によってウスペンスキー聖堂として再建された。フセヴォロド3世は、白石の外壁を補強し、フレスコ画など内部を新しくした。ウスペンスキー聖堂はその後、1238年にタタールから襲撃（タタールのくびき）を受け、1536年には内部が焼けたが、1862年ゲオルギヤ聖堂のレンガを利用して壁を補強し、1888年から1891年にかけて、元の状態に戻した。

＜表2＞ ウスペンスキー聖堂建築過程

年代	建築過程	支配者
1158年-1160年	アンドレイ公の聖堂として建立	アンドレイ・ボゴリュプスキー
1185年	市中大火災にて焼失	フセヴォロド3世
1185年-1189年	ウスペンスキー聖堂として再建	フセヴォロド3世
1238年	タタールから襲撃を受ける	ユリー3世？ヤロスラフ？
1536年	聖堂内部が焼失	
1862年	白石外壁の補強	アレクサンドル2世
1888年-1891年	原状に復元	アレクサンドル3世

ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂はノヴゴロド公国のディシャティン教会（十分の一税教会）⁹

⁹ 現存していない

やソフィア聖堂、キエフ公国のウスペンスキー聖堂（図5）によく似ている。キエフ公国のウスペンスキー聖堂はビザンティン帝国（現トルコ）のアヤ・ソフィア聖堂を模倣している。一見、ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂もアヤ・ソフィア聖堂の模倣のように思えるが、歴史的背景は上記の2つの教会・聖堂とは全く異なる。なぜなら、ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂はキエフ府主教の承認なしに設計し、建設を行ったからである。そのことによって、一時期礼拝を禁じられることになった。ゆえに、ヴラジミル市のウスペンスキー聖堂はキエフからの独立の象徴であった。



図5 キエフ・ウスペンスキー聖堂

これらの状況を踏まえ、以下の3つの疑問を考察しよう。

- a) ヴラジミル市中および、その周辺地方都市の教会や聖堂の建設者は誰であったのか？
- b) 独特な様式、特徴的な外装を誰が考え描いたのか？
- c) なぜキエフ公国に承認を得られなかったのか？

a) 12世紀初め、ヴラジミル市では首都建設の大事業には地元の職人が不足していた。ユリー・ドルゴルーキーは、「ルーシ全土から職人達を」¹⁰ 招集したがうまくいかなかった。年代記には「神が（世界）全土から職人を送り届けてくれた」¹¹ と記載されている。修道士達が年代記を編集したので、この言葉はキリスト教思想を思わせる文章ではある。ここで、筆者が示したいのは、ルーシの中では職人を集めることが出来なかったという状況である。そして、職人達たちは、現在のヨーロッパ諸国に位置する、ルーシから見て西側の西洋から送られた異文化を具える人々であった。つまり、これらの職人達は、キエフ公国やドニエプル流域からのレンガ積みの専門家ではなかった。彼らは白石建築の技術職人で、多くは西洋のロマンス派（ローマ中心の建築美術集団）からの職人であった。彼ら職人達は、フリードリッヒ・バルバロッサ皇帝¹² よりアンドレイ・ボゴリュプスキーの元へ派遣されていた。

b) 独特な様式に至った要因はやはり、西洋から職人を受け入れたことにあると筆者は考える。西

10 年代記の表現をそのまま翻訳した。引用：N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov" M 1961

11 注釈10と同様。引用：N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov" M 1961

12 フリードリッヒ・バルバロッサ（在位1152-1190）神聖ローマ皇帝

洋の職人達は、建設するだけでなく、ヴラジミル市の地元職人を育成した。フセヴォロド3世の頃になると、西洋から職人を招致する必要は無くなり、地元の職人が建設をし、装飾を施すことが出来るようになる。ただし、現時点で筆者は外壁のレリーフを誰が考案したかに関しては言及を差し控えたい。

c) キエフ公国に承認されなかった理由の一つとして、聖堂の建設者についての説明と幾分重複するが、西洋の様式を取り入れ、キエフ公国の建築の法律や習慣を遵守しなかったことにある。キエフ公国からの独立を進めることで、ヴラジミル市が他の地域と一線を画し、独自の文化を見出す結果を導いたと考えられる。

4. ヴラジミル市の建築装飾

聖堂の外壁全面にレリーフ（図6）を施していることは、ヴラジミル市の建築の大きな特徴である。残念ながら、市中を何度も見舞った大火災や、14世紀のタタール襲撃、またはソ連時代の宗教弾圧によって聖堂が消失し、多くは残存していない。従って、一般化した見解を提起することは難しいが、個別に検証をしながら、レリーフに表現された世界観を示したい。以下に挙げる3つの例はレリーフのテーマがはっきりしている。

第1に、ウスペンスキー聖堂のレリーフをとり上げる。レリーフのテーマは、「マケドニアのアレクサンドルの昇天」（図7）「セバスチャンと40人の殉教者達」「炎の中の3人の少年達」（図8・図9）



208. Дмигриевский собор. «Вознесение Александра Македонского».

図7 「マケドニアのアレクサンドルの昇天」

出典：N・N・Voronin "Zodchestvo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"



62. Успенский собор, «Три отрока в пещи»
(схема по И. О. Карабугу).

図8 「炎の中の3人の少年達」出典：N・N・Voronin
"Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"

である。ドミトリエフスキー聖堂にも「マケドニアのアレクサンドルの昇天」(図7)と「炎の中の3人の少年達」のテーマは描かれている。「マケドニアのアレクサンドルの昇天」のテーマについては、現時点で筆者はまだ出所を明らかにすることはできない。「セバスチャンと40人の殉教者達」については、次のような事実が勧化得られる。すなわち、1160年代、40人からなる巡礼団がノヴゴロド市から聖地エルサレムに出かけたことが年代記(年代記名不明)¹³に記録されている。この巡礼団はエルサレムから聖者の遺骨を持ち帰ったという。「図8」はその時のキリスト教巡礼者の一大事件をテーマに取り扱ったと筆者は推察する。さらに、「炎の中の3人の少年達」は1185年のヴラジミル市中の大火災を表現している。

第2に、ドミトリエフスキー聖堂(図10)の例を見てみよう。N・N・ヴォロニン¹⁴はドミトリエフスキー聖堂の4つの特徴を挙げて



図9 「炎の中の3人の少年達」出典：N・N・Voronin
"Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"



図10 ドミトリエフスキー聖堂の中心レリーフ

13 田中陽児・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史1-9～17世紀』、山川出版、1995年、p.443から導かれもので、年代記名は現在確認作業中である。

いる。

- a) ウスペンスキー聖堂と同じような様式である。
- b) 教会や公の宝石館のような、芸術的モニュメントである。
- c) 農村的。
- d) ロシア民衆の神話や御伽噺の世界に近い。

この中で、c) 及び、d) はレリーフに関しての解説である。ロシアには、口承文学が多く残されている。新しい「キリスト教」の聖堂に、古い「民衆の伝承文化」が反映されていると言えるかもしれない。後世、ロシアのキリスト教会や聖堂の外壁及び門の扉に英雄叙事詩（バイリーナ）が表現されるようになる。宗教文化と伝承文化がうまく融合したことは、ロシアの文化の一端を垣間見るようである。

最後に、ポクロフ・ナ・ネルリ教会（図11）の例を見てみたい。アンドレイ・ボゴリュプスキーが、戦死した息子イジヤスラフを想い、追悼のためにこのポクロフ・ナ・ネルリ教会を建設した。ポクリフ・ナ・ネルリとは、ネルリ川沿いのポクロフ教会という意味である。同教会のレリーフは、天上のダヴィデが自然界や、地上を支配する構図（図12）を描いたものと思われる。ダヴィデはグースリを弾いており、足元にはライオンが仕えている。ライオンは神の守護神としての意味を持っている。N・N・ヴォロニンがレリーフのモチーフに関して、使用された個数、1人あたりの費やされた労働日数、当該モチーフに費やされた1人あたりの全労働日数を表（図13）にまとめている。

今回示したかったことは、このレリーフにテーマがあり、そ

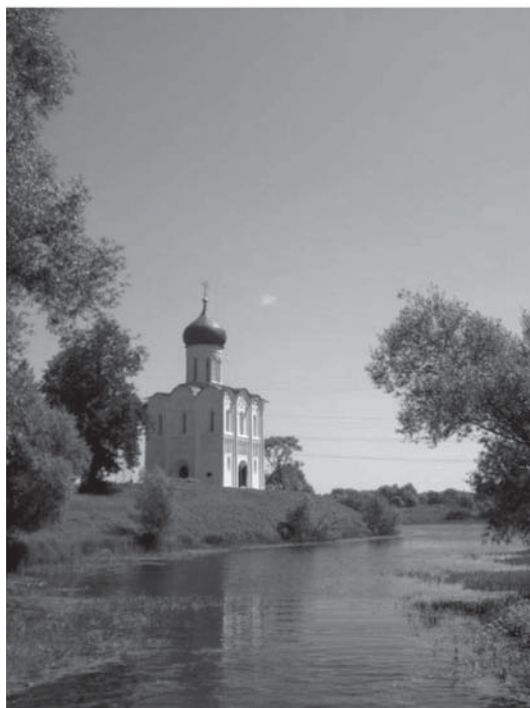


図11 ポクロフ・ナ・ネルリ教会



図12 ポクロフ・ナ・ネルリ教会のレリーフ構図

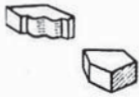
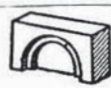
部品の柄	数	労働日数／個	総労働日数	備考	部品の柄	数	労働日数／個	総労働日数	備考
	48	0,59	28,32			52	1	52,0	
Элементы окон	48	0,24	11,52		Сухарчатый поясок на барабане				
		1,44	69,12			30	2	60,0	
		0,30	14,40		Зубчатый фриз на барабане				
	10	5	50			16	3	48,0	
Капитель полуколонны					Капитель на барабане				
	85	0,36	30,60			3	5	15,0	
Сухарчатый поясок над арматурой		0,25	21,25		Фигура Давида				
	68	1,46	99			6	2	12,0	
Арматура фриза		0,43	29,24		Птица				
	55	4	220,0			6	2	12,0	
Аркатурный фриз; капитель					Фигура льва				
	47	1	47,0			6	2	12,0	
Аркатурный фриз; колонка					Фигура льва				
	47	2	94,0			19	2	38,0	
Аркатурный фриз; база					Маска				
	47	2	94,0			6	4	24	
Аркатурный фриз; консоль					Грифон				
	24	2	48,0			20	5	100	
Арматура барабана					Резная плита				
	24	1,5	36,0			20	1,5	30,0	
Пояс под арматурой барабана					Профиль внутри барабана				

表3 ポクロフ・ナ・ネルリ教会のモチーフ一覧

出典：N・N・Voronin "Zodchestvo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov"

の背景に歴史事実が存在することである。また、ロシアの口承文学や英雄叙事詩が根拠となっているのではないかという方向性も打ち出せたことと思う。N・N・ヴォロニンがまとめたように、モチーフの種類と個数を洗い出すという方法をレリーフ全て¹⁴で行えば、何らかの手がかりが得られると予想する。今後、これら個々の教会のレリーフを綿密に分析することで、新たな見解を打ち出したい。

まとめ

石工はどの都市においても、構成市民の中でも下級市民という位置づけであった。ヴラジミル市の形成初期における構成市民はロストフから逃れてきた人々であり、豪族ではなかった。多くは、下級市民もしくは、奴隷といった不遇な人々であった。ヴラジミル市が建築文化で大いに発展を遂げた理由は、支配者による建築振興策だけでなく、それに反応した石工などの下級市民が技術を高めることが出来たからであろう。

また、キエフ公国からの文化的独立を果たすに至った西洋との文化交流は、ヴラジミル市が、強国となる一要因となったであろう。キエフ公国からの脱却は、キリスト教の受容元であるビザンツからの脱却にもつながった。そして、キリスト教の教義のみを受容し、キリスト教の芸術文化や建築文化は、ロシアの口承文学や世界観を大いに反映させた。上述のように、それらロシアの民衆文化はレリーフに表現されている。言い換えれば、ヴラジミル市は「ロシア的な文化」を形成する結果となった。我々が、多民族国家ロシアの文化的起源を求める時、ヴラジミル市の建築文化の発展はその良い指針になるように思われる。

参考文献

N・N・Voronin "Zodchestovo Severo-Vostochnoi Rusi XII-XV vekov" M 1961.

田中陽児・倉持俊一・和田春樹編集『ロシア史1-9～17世紀』、山川出版社、1995年

B・O・クリュチェフスキー著、八重樫喬任訳『ロシア史講和1』恒文社、1979年

松木栄三著『ロシア中世都市の政治世界 都市国家ノヴゴロドの群像』、彩流社、2002年

14 研究調査対象は、以下の6件である。ウスペンスキー聖堂、ゲオルギエフスキー聖堂、ドミトリエフスキー教会、ロジュジェストヴェンスキー教会、ロジュジェストヴェンスキー修道院、ボクロフ・ナ・ネルリ教会